国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成26年6月1日発行　第38巻第6号通巻第441号

みんぱくは創設40周年を迎えます

月刊みんぱく

2014 6月号

特集 朝鮮半島の文化

マトリックス展示！　太田心平／食から見る植民地期　朝倉敏夫
植民地期にもちこまれたモンペ　李 大和
生活リズムを作る時間と近代化　澤野美智子
「ノリ」ってなあに？　髙 正子／「いる、つなぐ」　ベル裕紀

日韓の狭間で生きる

朴（パク） 一（イル）

ごく普通の大学教員をしていた私が、テレビの世界とかかわるようになったのは、今から一〇年前、ある討論番組に出演させてもらってからである。最初は、担当ディレクターに「竹島（独島）がなぜ韓国領なのか、韓国側の立場から説明してほしい」と言われ、自己主張は封印し、韓国政府の解釈を客観的に説明しただけだった。

ところが、放送日の翌日、大学には「税金で反日教授を雇うな」という苦情が殺到した。こうした苦情は現在も少なくない。それでも、私がテレビに出るのは、日本の人々に領土問題や歴史認識に対する他国からの見方・視点というものを紹介したいからである。

もちろん、韓国人にも日本人の見方・視点を知ってほしいと思っている。そんなとき、私が日本で出版した本を韓国の外交通商部から翻訳出版したいという依頼があった。ところが、翻訳が終わって、韓国で出版される直前、韓国の外交通商部から出版にストップがかかった。理由は、本の内容が日本側の立場から書かれた親日的な書物で、公的財源では出版できないというものだった。

マスコミ受けしたいなら、日本では親日的な発言を、韓国では反日的な発言をすればよいのだが、日本と韓国の狭間で生きてきた私にはそれができない。韓国や日本のどちらかの国益の立場から発言するのはたやすい。だが、両国の利害が微妙に絡み合う中で、歩み寄るのは想像以上に難しい。韓国には韓国の、日本には日本の、それぞれ歴史解釈があり、そうした歴史解釈を前提にした領土認識があるからだ。少しだけ日本人が韓国の立場を理解する努力をし、韓国人が日本の立場を理解しようとすれば、日韓の歩み寄りはたやすくなると思うのだが、複雑ないきさつをもつ両国の歩み寄りは簡単ではない。

しかし、日韓関係を加害者と被害者、親日や反日、韓流や嫌韓流という二項対立の構図から理解しようとするのは、時代遅れだと思う。経済のグローバル化が進む中で、個人、企業、国家の利害はますます衝突する可能性を増している。グローバル化が進展するにつれて、存在感を失いつつある国家が自らのナショナリズムを強化しようとする時代であるからこそ、相互依存関係にある日韓が、相互理解を深めながら、互恵関係を再構築していく重要性は高まっている。今、両国に必要なのは、お互いに歩み寄る寛容さであると思う。

プロフィール
1956年兵庫県生まれ。在日韓国人3世。同志社大学卒業、同大学院博士課程修了。商学博士。現在、大阪市立大学大学院経済学研究科教授。著書に『在日という生き方』、『在日コリアンってなんでんねん』、『僕たちのヒーローはみんな在日だった』、『日本人と韓国人「タテマエ」と「ホンネ」』（いずれも講談社）などがある。一昨年、『在日コリアン辞典』（明石書店）の編集・出版で韓国国務総理表彰を受けた。

月刊 みんぱく 6月号目次

1 エッセイ　千字文
日韓の狭間で生きる
朴 一

2 特集
朝鮮半島の文化

2 マトリックス展示！
——新しい「朝鮮半島の文化」展示　太田 心平
4 食から見る植民地期　朝倉 敏夫
6 植民地期にもちこまれたモンペ　李 大和
7 生活リズムを作る時間と近代化　澤野 美智子
8 「ノリ」ってなあに？　髙 正子
9 「いる、つなぐ」——韓国の外国人支援　ベル 裕紀

10 集めてみました世界の〇〇
ボードゲーム編

12 みんぱく Information

14 文化遺産おもてうら
無形文化遺産をめぐる認識
——エチオピアの音楽職能集団ラリベロッチ
川瀬 慈

16 多文化をあきなう
綿花の有機栽培とフェアトレードは両立するか
牧田 りえ

18 味の根っこ
リュテニツァ
マリア・ヨトヴァ

20 人間学のキーワード
クィア
新ケ江 章友

21 異聞逸聞
ヤマトと琉球のはざまで
前田 達朗

22 制服の世界、世界の制服
曼荼羅をまとい宇宙になる
大内 典

24 次号予告・編集後記

特集

朝鮮半島の文化

現代の朝鮮半島の文化を理解するためには、伝統社会や植民地／近代という時間軸も欠かせない。伝統的要素は、どのようにいまも息づいているのか。シベリア的、中国的、日本的な要素は、いつ持ち込まれ、どのように受け入れられたのか。朝鮮半島の昔と今をつなぐ、新しくなった展示のエッセンスを紹介する。

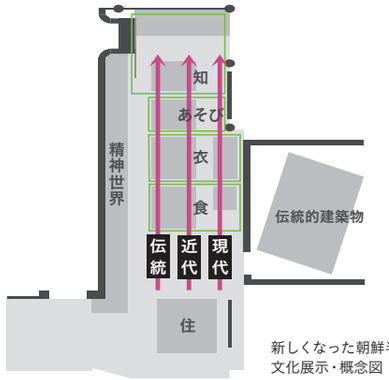
長柱（チャンスン）とソッテ
地域：忠清南道 青陽郡
標本番号 H0209862ほか

マトリックス展示！
――新しい「朝鮮半島の文化」展示

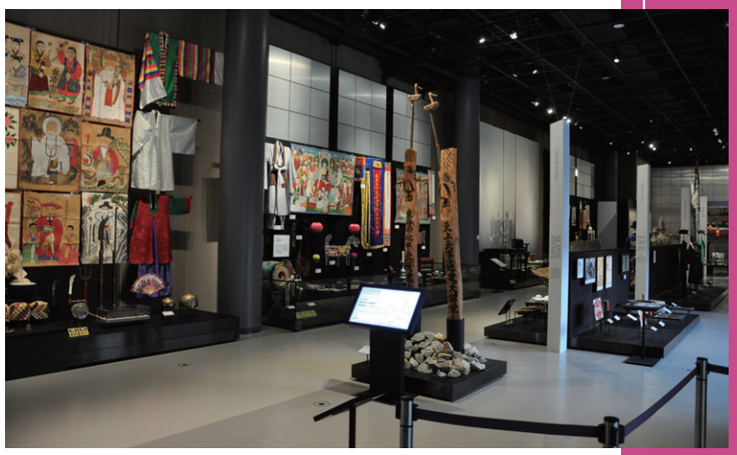
太田心平（おおたしんぺい）　民博 民族社会研究部

朝鮮半島の文化展示は、二〇〇〇年の展示換えの際、準備段階で討議されながらも、展示に活かされなかったアイデアがいくつかあった。また、観覧した韓国人から、朝鮮半島の文化の躍動性をもっと伝えてほしいという要望が出されてもいた。

うなぎの寝床のようなスペースのなかで、これらの課題や要望を解決するため、知恵をひねったデザインこそが、マトリックス（行列）展示だ。新しい展示場は、精神世界、住、食、衣、あそび、知という六つのセクションからなっている。このうち、食、衣、あそび、知の四つは、ヨコの「行」に沿って並んでいる。だが、これらを三つに走るタテの「列」に沿って観ていけば、また違った楽しみ方が出来る。伝統文化の列、植民地／近代文化の列、現代文化の列にわかれており、時代別に楽しむことも出来るのだ。



新しくなった朝鮮半島の文化展示・概念図



食の文化

食のセクションは、伝統社会における農業や畜産、調理や配膳の道具がならぶ列からはじまる。これらは、昔のものであるが、現在にいたるまで食文化の礎となっている。たとえば、キムチを漬ける年中行事や、箸と匙（さじ）を使う食事作法がそれだ。

中央の列では、植民地化や近代化の影響を受けた食文化を展示している。朝鮮半島では、日本の植民地支配の時期に、日本の食文化が朝鮮半島に入っていった（本特集の朝倉論考を参照されたい）。また、調理科学、衛生、栄養という概念が朝鮮半島に取り入れられたのも、このころからだ。これらも現代に引き継がれている。

小規模ながら、現代の食文化をしめす列も設けた。よい水が健康の源になると考えていた朝鮮半島では、浄水器が家庭に早くから普及した。水と同じく甕（かめ）や桶（おけ）で保管されていたキムチも、キムチ冷蔵庫で保管するようになりつつある。このセクションからは、食が変化したということだけでなく、朝鮮半島の固有の食文化が、世界化とテクノロジーの発展で、むしろ助長されてきたことも、確認してほしい。

衣の文化

伝統文化の列では、朝鮮半島でおこなわれる人生儀礼にもとづいて、それぞれで使われる伝統的な衣装を展示した。特に、伝統式の結婚衣装は、かつてから人気が高い展示物である。これらの人生儀礼や伝統的な衣装も、現在でも使われている。

植民地と近代の列には、日本人の目には懐かしい学ランとセーラー服が並んでいる。朝鮮半島で学校が作られたのは、日本による植民地支配の時代だった。だから、日本から独立したあとも、学校制度には日本の影響がみられる。植民地を脱したあとも、人びとは意図しない形で植民地時代の影響を受けているのだ（李の論考も参照）。

現代の衣装の列でも、学生服の展示が目に飛び込んでくる。学生服の概念は、現代でも生きている。また、現代の結婚式でしばしば着用されている新しい婚礼衣装も展示している。これは、伝統的なスタイルにならいながらも、洋風のデザインをふんだんに取り入れたものだ。それぞれの時代の重なりを、比較しながら味わっていただきたい。

あそびの文化

朝鮮半島であそびといえば、日本語のあそびよりも幅広いことをしめす。仕事のあいまの休息方法や、余暇生活の楽しみ方をもふくむ。あそびの伝統文化の列では、朝鮮半島のおもに民俗芸能を紹介している。人びとは、仕事のあいまの農楽や仮面劇で、心と体の疲れをいやした。ときにこれらは、被支配層のうっぷん晴らしとして、社会の安定を保つ機能もはたした（高の論考も参照のこと）。

対して、植民地期や近代化の過程では、産業が広域化し、人びとの交通範囲が拡大し、情報がメディアに乗って広まるようになった。そうして、観光旅行、博覧会の観覧、土産物集めというあらたな娯楽が生まれた。植民地／近代の列では、この状況を物語る展示をしている。

現代の列では、韓流の世界進出や、現代の子ども部屋にみられる品を展示している。昨今の

折衷様式の婚礼衣装　地域：京畿道 安山市
標本番号 H0274959-H0274964

食から見る植民地期

朝倉敏夫（あさくらとしお）
民博 民族社会研究部

とにかく「食べる」

韓国文化を語るのに、食ははずせない。身近な人との挨拶には「ご飯食べた？」と声をかける。正月を迎えると、トッククという雑煮を食べ、歳を取ることを「歳を食べる」という。夏には補身湯（ポンタン）という消夏のためのスープを食べるが、夏負けすることを「暑さを食べる」という。決心することは「心を食べる」、侮辱されることは「辱を食べる」という。とにかく「食べる」のが、韓国文化である。

今回の展示では、韓国の近代化をテーマに加えた。韓国の近代化は、植民地期とつながる。植民地期の出来事は、政治的には韓国人の「反日感情」を呼びおこすが、植民地に伝えられた日本語は、いまだに韓国社会でひろく使われている。なかでも食に関することばが多い。ワリバシ、サラ、ベントウ、サシミ、ウドン、オデン、オムライスなどなど。

「食の文化」セクションに展示されている、ウドンとオムライスの複製。ウドンは、植民地期を知る人の話をもとに作ったもの。日本料理屋のもので、当時はホウレンソウが入っていたという。オムライスはオーソドックスな形だが、タクワンが添えられているのが特徴

韓流については、ここであらためて述べる必要もない。しかし、経済規模でいうと、韓国で消費される日本文化は、日本で消費される韓国文化の一〇倍以上といわれる。よって、韓国語に訳された日本の漫画本も展示している。楽しみ上手な朝鮮半島の人びとの文化と、このセクションで出会ってほしい。

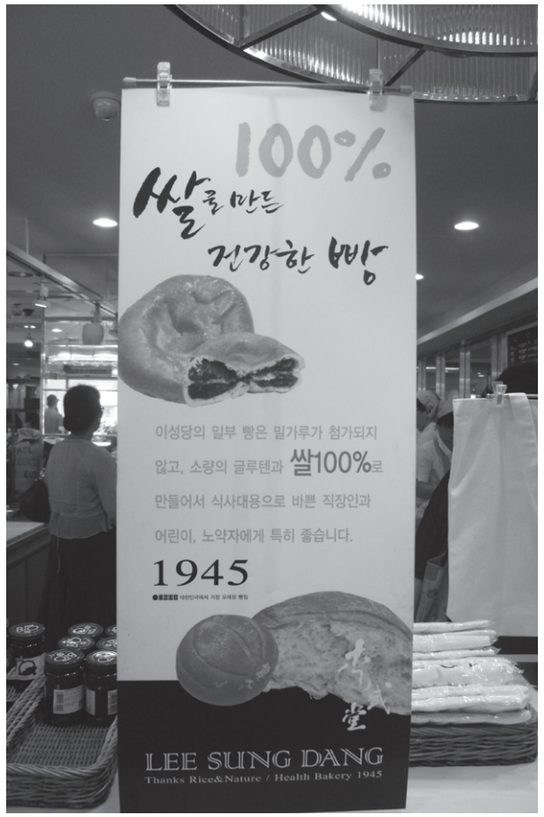
知の文化

朝鮮半島の社会は、勉学や研究、そして自分をみがき、よりよく生きていくために努力することをたいへん尊んできた。伝統文化の列は、精神世界のセクションにある儒教文化の展示と深い関係にある。朝鮮王朝時代までの朝鮮半島では、儒学が知の文化を支えていたからだ。

これに対し、植民地／近代化の列には、独立後の韓国で一世を風靡（ふうび）したセマウル運動を例に、国民啓蒙（けいもう）に関する展示をしている。この運動の浸透もあり、民間の在来知は急速に失われ、西欧的な知識体系が人びとを支配するようになった（澤野の論考も参照されたい）。

最後は現代の知の列だ。ここには韓国の都市部に多い巨大書店を模した。本棚のひとつは、司法試験の対策の参考書を集めたもの。韓国では国家資格の取得が特に人気で、多くの若者がその準備に何年もを費やす。おなじ知識欲や上昇志向の強さは、もうひとつの本棚、移民と留学に関する本棚にもあらわれている（ベルの論考も参照）。ここでは、こうしたハングルの本を、手にとって御覧いただける。

アンクムパンは売れ行き好調。店に出される時間が表示される



上：店内のバナー。「100％米で作った健康なパン」とあり、「1945」の下には「大韓民国でもっとも古いパン屋」と小さく書かれている
左：イソンダンの店構え

食でたどる人の足跡

そのひとつにアンクムパン（あんパン）がある。植民地期に多くの日本人が住んでいた全羅北道の群山市では、市内に残る日本時代の建物を保存し、「近現代史博物館」を設立し、近代文化遺産を観光資源として地域振興を進めている。この街の名物が韓国最古のパン屋「イソンダン（李盛堂）」のアンクムパンである。イソンダンは、日本人の経営した「出雲屋」を、一九四五年に韓国人が引き継いだ店である。

この出雲屋について研究した本がある。『パンの百年史　第一部　群山の出雲屋』（全北大学校無形文化研究所、二〇一三年）である。著者は、全北大学の人類学科で二〇世紀の民衆史を研究する咸翰姫（ハムハンヒ）教授とそのお弟子さんの呉（オ）セミナさんである。

今回の展示では、咸翰姫教授を本館の外国人客員研究員としてお招きし、諮問と協力をあおいだ。展示したウドンとオムライスについても、咸教授のお弟子さんの一人で、韓国国立民俗博物館の姜炅杓（カンギョンピョ）学芸員にお世話になった。ウドンもオムライスも、日本生まれの食べもので、植民地期に朝鮮半島に渡ったものである。しかも、このふたつのメニューは、なぜか現在も韓国の中華料理店にもある。そこで仁川市のチャイナタウンの民俗誌を書いた姜炅杓さんに紹介してもらい、華僑の中国料理店経営者からも話しをうかがった。

韓国の中国料理店にはトウガラシで真っ赤に燃えたチャンポンもある。それは中国を母体としながらも、植民地期の日本人や、マジョリティとしての韓国人の足跡が残されたものである。これらの食は、韓国近代化の歩みを語ってくれる。

植民地期にもちこまれたモンペ

李大和（リデファ）　中央大学校非常勤講師

強制から選択に

戦時中の朝鮮半島は極端な日本化を強要された暗い時期であった。しかし植民地の朝鮮人にとってアジア太平洋戦争は、自国とは関係のない戦争であった。このため、日本化が積極的に受け入れられることを期待するのは、とうてい望めないことだった。

しかし、一九五〇年に勃発した朝鮮戦争と、それに伴う極度の貧困は、植民地時代の経験を朝鮮の人びとに思い出させ、それらを選択して日常生活に取り入れるきっかけとなった。結局、終戦とともに風化していった戦中日本の生活要素が、朝鮮半島特有のものとして進化するという、なんとも皮肉な状況が生み出されたのである。

韓国の市場で売られている派手なモンペ（2014年4月撮影）

受け入れがたい服装

モンペは日本の庶民女性が作業服としておもに着用していたものが、アジア太平洋戦争期に女性の銃後活動の象徴になった服装である。それは当時植民地であった朝鮮半島でも同様だった。ただ、このモンペがチマチョゴリの下着として着る〝コジェンイ〟に似ているという問題があった。ゆえに、朝鮮の女性たちにとっては、まるで下着姿のまま街を歩き回るような羞恥心を誘発した。しかも、韓服の上着（チョゴリ）は肩から胸の上部だけを覆う服なので、チマ（スカート）の代わりにモンペを着ると、胸から腰がそのまま露（あらわ）になってしまうという問題もあった。

それにもかかわらず、愛国班（日本の隣組に該当）の活動をするときには、必ずモンペを着ることが強要されたので、チマ（韓服のスカート）の上にモンペを着るしかなかった。だが、腰と脚の線を露出することに抵抗感をもっていた朝鮮の女性たちにとって、モンペは、本当に受け入れがたい服装だったのである。

韓国のおばさんのシンボルに

ところが、やがて変化の波はおとずれた。朝鮮戦争は朝鮮の女性たちに羞恥心を捨てさせ、モンペを着ることになるきっかけとなった。戦争に動員された男性の代わりに、主婦が生計を立てていかねばならかったため、チマよりも働きやすいモンペを着用するしかなかったのであろう。また、貧しい避難生活のなかで新しい服を仕立てるより、闇市場で売っている軍服のズボンをモンペに仕立て直して着る方が効率的だったという点も一因と考えられる。

しばらくしてモンペは朝鮮半島でも作業服として一般化するようになり、色とりどりのモンペが現在にいたるまで伝統市場を中心に多く販売されている。韓国で大人気のバラエティ番組では、女性コメディアンが中年のおばさん役で出演するコーナーが最近まで放送された。彼女のスタイルを見ると、おばさんパーマのヘアスタイルに、携帯電話を首からかけて、モンペをはいているといった具合だ。番組の視聴者層が高校生からお年寄りまで幅広いという点を考えると、モンペは韓国の田舎のおばさんのシンボルとなったに違いない。

みんぱくで展示されている韓国のモンペ
標本番号 H0274588

生活リズムを作る時間と近代化

澤野美智子（さわのみちこ）　ソウル大学校比較文化研究所研究員

農村の時間

「太陽は今どのくらい昇ったかね」。このことばは、筆者が滞在していた家のハルモニ（おばあさん）が時間を尋ねるときの決まり文句であった。現代韓国社会において一日のリズムを決める基準は、都市で暮らす人びとにとっては時計の示す時刻がすべてである。しかし農村の高齢者たちにとっては必ずしもそうではない。

農家にも必ずといっていいほど、大きくて立派な時計がある（2008年撮影）

農村の高齢者たちは、日の出に合わせて起床し、田畑に出る。太陽が南中に差し掛かるのを見て昼食をとりに帰宅し、食後は再び田畑に出る。そして日没とともに帰宅し、夕食をとって就寝する。夏には午前六時になっても起きないと「怠け者」扱いされるが、冬には午前八時ごろに起床し始める。また、夏は午後八時ごろにやっと日が沈んで夕食にありつけるのに対し、冬には午後五時ごろに日が沈むと夕食を食べてしまう。

複数の時間を生きる

しかし同時に、人びとは時計で刻まれる時刻もよく把握している。例えば高齢女性たちは村の「敬老堂」（高齢者専用の公民館）でテレビの連続ドラマを観るのを非常に楽しみにしており、その開始時刻に合わせて「敬老堂」に集まる。このほか、バスの時刻や教会の礼拝の時刻なども、人びとは時計を確認しながら遵守している。「太陽は今どのくらい昇ったかね」という問いに対するもっとも適切な答え方は、「九時半です」などといった、時計の時刻を用いた表現である。文字を読むことのできないハルモニも、時計を見て時刻を把握することはできる。つまり時計の時刻を読むことは、文字の読み書き以上に重要なものとして教えられてきたのであろう。ハルモニは屋外にいるときは空の太陽を見上げ、室内にいるときは壁の時計を眺めて、一日に何度も時間を確認していた。

複数の時間基準を併用することは一見すると混乱を招きそうなものだが、ごく自然に日常生活が営まれている。これは急速な近代化という、社会の大きな動きのなかで、人びとが融通を利かせながら対処してきた姿であると言えよう。

食事と食事の中間の時点は「セッテ」（間のとき）とよばれ、休息や間食時間の基準として認識されている。日照時間に合わせて食事時間が変わるため「セッテ」も変動する。田植えなどの際には「セッテ」に合わせて、「セチャム」とよばれる間食がふるまわれる（2008年撮影）

「ノリ」ってなあに？

高 正子（コオ ヂョンジャ）　神戸大学非常勤講師

「遊び」ということばからわたしたちはまず何を連想するだろうか。鬼ごっこ？ かくれんぼ？ それともトランプ？ テレビゲーム？ ……「遊び」ということばから連想されるのは概して競い合いや勝ち負けを楽しむ「ゲーム」なのではないだろうか。

朝鮮語でノリは日本語では概ね（おおむ）「遊び」と訳される。しかし、ノリは人が人と競い合い、勝ち負けを決めるゲーム的な要素に加えて、人と人が力を合わせてともに生きようとする気持ちを高める性格を有しているのである。そのような「遊び」は「大同ノリ」とよばれる。

毎年旧暦の1月15日に漆石村で開催されるコサウムノリ祝祭のようす（提供・韓国無形文化財33号コサウムノリ保存会）

第31回コサウムノリ祝祭の前夜祭でおこなわれる綱引きのようす（提供・韓国無形文化財33号コサウムノリ保存会）

人びとの気持ちをひとつにする「大同ノリ」

大同ノリとは、村や地域といったコミュニティで楽しむ遊びで、例えば、陰暦の一月一〇日くらいから作業が始まるコサウムノリなどがそれである。ここでいうコとは丸い輪をいい、丸太に藁（わら）で結ってつくったコを付き合わせて、上にチュルペジェンイとよばれる闘い手が乗り戦う。相手のコを地面にねじ伏せたチームが勝つのだ。しかし、どうしても決着がつかないときには、二月の初めに綱引きで勝敗を決する。ノリの過程を見ると、村人総勢で藁が持ち寄られコが作られ、そして力自慢の若者を選ぶ。決戦の当日は村の老若男女が総出で、民俗楽器が鳴り響くなかで、大声を挙げ一喜一憂しながら手に汗を握って応援することで勝敗に参加する。勝ったチームは村人総勢を連れて凱旋（がいせん）し、負けた村の金持ちの家に押しかける。金持ちの家では勝った村人をもてなす。ノリという共同作業をとおしてコミュニティの結束と和解が導き出されるのだ（現在でも全羅南道光州の漆石村でおこなわれている）。

このような大同ノリのなかには仮面劇やプンムル（農楽）などの民俗芸能も含まれているが、これらの大同ノリでは、それに先立って儀礼がおこなわれ、その延長線上で楽しまれるのだ。つまり、儀礼という緊張の後の弛緩（しかん）としてのノリは、非日常の空間に神明（シンミョン）（天と地の神霊）を呼び出し、その場に集まった人びとの葛藤を解き放ち、人と人が和解しひとつになる気持ちを生み出す。さらに、労働によって疲れた心と身体もまた「ノリ」によって癒され、解放されるのだと考えられている。

このように朝鮮半島のノリは高句麗・百済・新羅の三国時代から国の安寧や豊穣（ほうじょう）を願い祈る儀礼後、神に捧（ささ）げる歌舞がおこなわれたのが、ノリにかわったものだといわれている。もちろん、日本の双六（すごろく）に似たユッノリや凧（たこ）揚げなど、年中行事とともに楽しまれる民俗遊びもある。

「いる、つなぐ」――韓国の外国人支援

ベル 裕紀（ひろき）　東京大学大学院博士後期課程

韓国はこれまで、移民の送出国として知られ、近年でも早期留学や海外宣教師などが注目されている。しかしその一方で国内の長期滞在外国人は一二〇万人（二〇一三年末）を超えている。その四割は在留期間が五年未満のアジア諸国からの非熟練労働者であり、うち半数は中国朝鮮族や高麗人である。

2012年8月19日、移住労働者と支援団体によるデモ。事業所変更の自由を求めて

移住労働者がいる。移住労働者をつなぐ。

本稿の題名「いる、つなぐ」は、第一七回（二〇一二年）仁川人権映画祭のテーマから拝借したものである。この映画祭の運営者たちは、毎週末、移住労働者に映画製作を教えることで、移住労働者が自ら発言し、社会にかかわることを目指している。ただ、ここに「いる」から、社会と「つなぐ」という発想である。

韓国において外国人の存在が注目されたのは、九〇年代中葉に「移住労働者」（産業研修生と不法滞在者）の人権・労働権の問題が「人権の死角地帯」として取り上げられたのが契機である。韓国では七〇年代から一部のキリスト教会が、後に「民衆教会運動」とよばれる労働者や貧困層の支援をおこなっていたが、これらの教会の一部が九〇年代初頭、問題を抱えた移住労働者に出会ったのである。九〇年代中葉には民衆教会運動協議会で「今、この地で民衆は誰か？」と問題提起がなされ、反発もあったが、いくつかの移住労働者支援団体が設立された。さらに二〇〇一年には労組が支援を始め、新制度の導入と強制送還の中断、不法滞在者の合法化を要求した二〇〇三年の明洞での籠城闘争を経て、制度改正が実現された。

「労働権」でない移民の権利――「多文化家族」

二〇〇〇年代中葉になると支援団体はあらたな問題に直面する。このころ、一方で滞在の長期化した移住労働者が結婚や出産を経験し、他方で村落部の嫁不足などを背景として斡旋（あっせん）業者を介した国際結婚の増加が顕著になっていた。離婚やDV、子供の就学権や定住化などの課題が生じたとき、彼らは「多文化家族」などの語でその権利を訴えたのである。しかし、二〇〇八年に政府が「多文化家族」を韓国人男性とアジア出身女性の家族に限定し、支援対象として以降、それ以外の外国人の支援団体は活動費の確保も難しくなっている。それでも各団体は目の前に「いる」外国人が直面した問題に取り組み、社会と「つなぐ」ことを続けている。

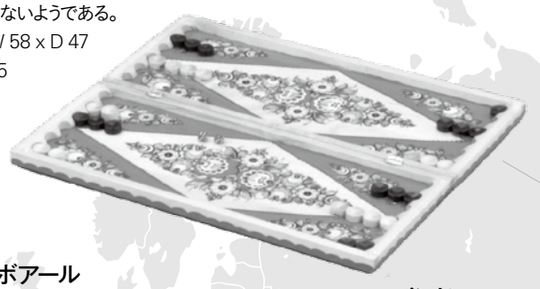
休日。街で友達と会い、買い物を終えて、それぞれの工業団地に戻る移住労働者

集めてみました世界の

みんぱくが所蔵している世界のゲーム・ゲーム盤を集めてみました。
双六やチェスや将棋が世界各地にあることがわかります。
しかしゲーム盤の形やルールは地域によってさまざまなようです。

※寸法の単位はセンチメートルです。

ロシア
かつてのオスマン帝国とともに広がったゲーム、タブラのボード。バックギャモンの先祖ともいわれ、東ヨーロッパではよく見かける。なお本資料のようにボード全体に模様が描かれているものは、現地ではあまり見られないようである。
H 2.9 x W 58 x D 47
H0213285



モンゴル
モンゴル将棋（シャタル）のボードと駒。シャタルはチェスのことでルールも同じである。
H 3.0 x W 41 x D 41
H0203485

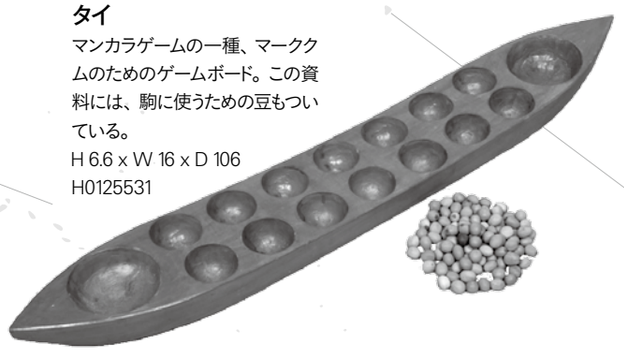
日本（三重県）
碁盤。裏側の中央部分にへこみ（へそ）があり、くちなしの実に似た形の足がつく。足は和釘で固定されており、古く、使い込まれたものであることがわかる。
H 26 x W 42 x D 49
H0032210

アメリカ合衆国
中国将棋の一式。7 種類 16 枚の駒をつかい二人で遊ぶ。ボードの中央には陣地を分ける河があり、象（または相）の駒は河を渡れない。中国では公園などの屋外で対戦する光景がよく見られる。
H 27 x W 38 x D 6.3
H0269022

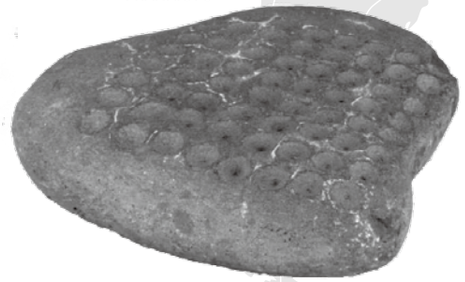
コートジボアール
セヌフォ人の彫刻師が制作したマンカラ用のゲームボード。中央に1頭のワニが浮き彫りで表され、両側にはワニとヒツジの頭がかたどられている。
H 23 x W 24 x D 90
H0030650

インド
インド流のチェス、チャトゥル・アンガム。王、大臣、ゾウ、戦車、ウマ、歩兵からなる駒を使う。チェスや将棋は、このゲームを起源として形を変えてきたものといわれる。
H 1.6 x W 51 x D 55
H0092922

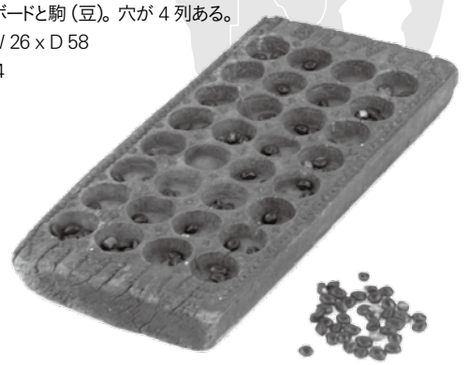
タイ
マンカラゲームの一種、マーククムのためのゲームボード。この資料には、駒に使うための豆もついている。
H 6.6 x W 16 x D 106
H0125531



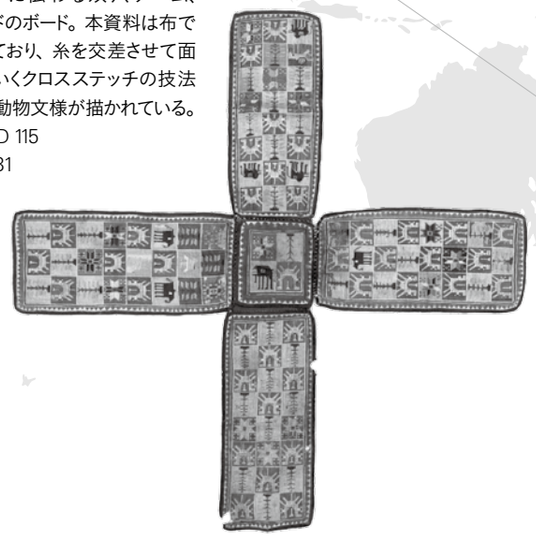
アメリカ合衆国
（ハワイ諸島モロカイ島）
ハワイの伝統的な遊び、コナネのためのゲームボード。くぼみに白と黒の駒を並べ、相手の駒を飛び越して取る。ルールはチェッカーに似ている。
H 15 x W 54 x D 50
H0080979



ザイール
ワレガの人びとが使用していたマンカラゲームのボードと駒（豆）。穴が 4 列ある。
H 5.5 x W 26 x D 58
H0118754



パキスタン
南アジアに伝わる双六ゲーム、チョーパドのボード。本資料は布でつくられており、糸を交差させて面をうめていくクロスステッチの技法で、花や動物文様が描かれている。
W 112 x D 115
H0238031



マレーシア
マンカラゲームの一種、チョンカのためのゲームボード。ふたがついており、全体が魚の形になっている。
H 7.1 x W 18 x D 120
H0150363

マンカラとは
くぼみに入れた石を移動させて競う対戦ゲーム。
地域によって名称、ルールはさまざまである。

みんぱく
Information

みんぱくフォーラム2014
東アジア展示があたらしくなりました!!
朝鮮半島の文化・中国地域の文化・日本の文化「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」の展示が新しくなってオープンしました!

■関連イベント

◆みんぱく映画会
「台湾映画鑑賞会――映画から台湾を知る」
台湾社会の情況や歴史経験を、台湾映画のダイナミックで繊細な映像を通してお楽しみ下さい。
時間　13時30分～16時30分（13時開場）
会場　本館講堂（定員450名）
6月8日（日）
「童年往事　時の流れ」
経済成長にともなう台湾化の中の外省人の経験
6月14日（土）
「海角七号　君想う、国境の南」
現代の台湾社会の温度を感じさせる世代間関係
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布
※当日11時30分より中国地域の文化展示場にて展示解説あり

◆展示場クイズ「みんぱQ」
朝鮮半島の文化編　6月12日（木）～7月15日（火）

企画展
「みんぱくおもちゃ博覧会――大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」
会期　8月5日（火）まで
国内有数の玩具コレクションの中から4つのテーマに沿って展示します。日本の玩具史の概要を知ることができます。体験コーナーには、すごろく、おはじき、ぬり絵、メンコなど楽しい遊び道具がいっぱいです。
※本企画展の期間中、大阪府立大型児童館ビッグバン（大阪府堺市）と日本玩具博物館（兵庫県姫路市）で相互割引を実施しています。

音楽の祭日2014-inみんぱく
1982年にフランスで、夏至の日にみんなで音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまりました。みんぱくでも、世界のさまざまな楽器を使って「音楽の祭日」を祝います。
日時　6月22日（日）10時25分～16時35分
会場　特別展示館・本館エントランスホール
※申込不要、参加無料（当日は無料観覧日です）
お問い合わせ先
情報企画課　音楽の祭日担当
電話　06・6878・8532

公開フォーラム
「和食は誰のものか?」
和食とはなにか、無形文化遺産とはなにかという基本的な点をふまえたうえで、われわれがどのように行動していけばよいかを話しあいます。
日時　6月28日（土）13時～16時30分（12時30分開場）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料

みんぱく映画会
「かぞくのくに」
国境や国籍のありかた、家族のかたち、日本の多文化性のゆくえ、越境が人の心にもたらす影響について、考えてみましょう。
日時　7月12日（土）13時30分～16時（13時開場）
会場　本館講堂（定員450名）
申込締切　6月20日（金）
※要事前申込、参加無料（要展示観覧券）
※当日11時30分より日本の文化展示場にて展示解説あり。

研究公演
「アリラン峠を越えていく――在日コリアン音楽の今」
在日コリアンが奏でる音楽には、マイノリティとしての体験や歴史の記憶が投影されています。朝鮮半島の伝統音楽をベースにした「音楽の今」をお楽しみください。
日時　7月20日（日）14時～16時30分（13時30分開場）
会場　本館講堂（定員450名）
申込締切　6月30日（月）
※要事前申込、参加無料（要展示観覧券）

みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター
「喜味家たまごの地球探究紀行」
研究者が撮影した世界各地の記録映像と研究者によるレクチャー。近鉄百貨店ならではの美味しいお弁当付き。
時間　11時～13時30分
会場　あべのハルカス近鉄本館「スペース9」
主催　産経新聞社
特別協力　国立民族学博物館、千里文化財団
※要事前申込（申込締切は各回開催日の1週間前）、参加費　各回4940円
6月11日（水）寺田吉孝（本館 教授）
人生は音楽の調べとともに――移り変わるインドの結婚式
6月18日（水）横山廣子（本館 准教授）
南詔大理国の末裔、ペー族の結婚式
6月25日（水）三尾稔（本館 准教授）
家族をつなぐ 社会をつなぐ――インドの婚礼
お申し込み・お問い合わせ先
ウェーブ産経カレッジシアター係
電話　06・6633・9087

●研究公演、映画会等参加方法変更のお知らせ
4月から、研究公演、みんぱく映画会、みんぱくワールドシネマにご参加いただく際、当館の展示観覧券のご提示をお願いすることといたしました。
なお、みんぱくフリーパス、国立民族学博物館友の会会員証、キャンパスメンバーズの学生証等をお持ちの方は、ご提示いただくと、観覧券は不要です。

●無料観覧日のお知らせ
6月22日（日）は、本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園を通行される場合は、入園料が必要です。
※各イベントについてくわしくはホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。

国立民族学博物館創設40周年記念
日本文化人類学会50周年記念
「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」
迫りくる力、驚きとの出会い、このアートを体験しよう
会期　6月9日（月）まで
会場　国立新美術館企画展示室2E（東京）

訃報　周達生名誉教授
本館名誉教授の周達生（しゅうたつお）先生（八二歳）が本年五月四日逝去されました。みんぱく創設後間もない一九七九年、はじめての外国人研究員として着任され、一九九五年教授として定年退官されるまで、みんぱくの中国研究や中国文化展示の基盤作りに努められました。中国食文化の紹介者として知られたほか、民族動物学を提唱し、民族ごとにみられる動物と人間の特殊なかかわりあいに視点をおいた多くの著作があります。謹んでお悔やみ申し上げます。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/　　みんぱくフェイスブック　http://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　http://twitter.com/MINPAKUofficial　　電話でのお問い合わせ　06-6878-8560（本館 広報係）

みんぱくゼミナール

時間　13時30分～15時（13時開場）
会場　本館講堂
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は観覧料が必要です）

第433回　6月21日（土）
現在進行形の海外移民――韓国を去りゆく人びとの胸のうち
講師　太田心平（本館 准教授）

2013年にソウルで開かれた「移民博覧会」（金桂淵撮影）

朝鮮半島の外に暮らすコリアンは、いまや750万人以上。しかし、韓国において移民という行為は、けっして昔の話などではありません。今日でも、毎年、人口の0・3％以上もの人びとが、外国へと移民していきます。人びとはどうして韓国を去ろうとするのか、近年の調査研究をもとにお話しします。

第434回　7月19日（土）
泡盛今昔物語
講師　日高真吾（本館 准教授）
萩尾俊章（沖縄県教育庁文化財課 副参事兼班長）

酒造組合連合会の泡盛広報写真（昭和30年代）

泡盛は琉球王府の管理の下、首里の指定酒屋で生産されていた蒸留酒。かつて首里城には数百年ものの古酒が伝わり、外交や接待の際に振る舞われました。18世紀前半には一般にも広まりをみせ、今も人気を博しています。ここでは、泡盛の今昔を紹介しながら、沖縄の歴史に触れてみたいと思います。

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

会場　本館ナビひろば
時間　14時30分～15時30分
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）
本館の研究者が来館された皆様の前に登場します!「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

6月1日（日）
話者　河合洋尚（本館 助教）
話題　華僑の移住と暮らし――ベトナム
6月15日（日）
話者　太田心平（本館 准教授）
話題　韓国文化の変わった点と変わらない点
6月29日（日）
話者　日高真吾（本館 准教授）
話題　時代玩具コレクションから見る日本の世相史

刊行物紹介

■武内房司、塚田誠之 編著
『中国の民族文化資源――南部地域の分析から』
風響社　5,000円（税抜）
文化資源という概念を切り口に民族文化の諸事象について、それらを生み出す諸主体との関係性にも注目して分析することで、現代中国の民族文化の見直しを試みる。

■杉本良男 編著
『キリスト教文明とナショナリズム――人類学的比較研究』
風響社　5,000円（税抜）
「文明の衝突」の根源に迫る。非ヨーロッパ世界における「キリスト教文明」による「近代化」の歴史過程とその帰結について検討、その功罪を人類学的視点から見直す。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　本館第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）
第433回　7月5日（土）14時～15時
【新展示関連】
ウチナンチューと教育
講師　日高真吾（本館 准教授）
呉屋淳子（本館 機関研究員）
新しくなった日本の文化展示場の「沖縄のくらし」では、多種多様な沖縄の文化を「シマ」、「町」、「海」、「野山」、「戦後」の5つの観点から展示しています。本講演では、このたびオープンした沖縄のくらしの展示内容についてお話ししたのち、戦後沖縄の教育事情について紹介したいと思います。さまざまな歴史的転換期を経験してきた沖縄で、教育が担ってきた役割をみなさんと一緒に考えます。
※講演会終了後、1時間程度の見学会を予定しています。
第434回　8月2日（土）14時～15時
【新展示関連】
植民地期に海を渡った日本の食
講師　朝倉敏夫（本館 教授）

東京講演会
会場　モンベル渋谷店5Fサロン
定員　60名（要申込）※一般の方も参加可能です。
第109回　6月28日（土）14時～15時
梅棹忠夫のモンゴル調査をたどる
講師　小長谷有紀（人間文化研究機構 理事、本館 教授）
梅棹忠夫にとってモンゴル研究は格別な意味を持っていました。残された記録を整理する楽しさ、その調査ルートを実際にたどった旅の途上での出来事についておはなしします。当日はフィールドノートのレプリカもお持ちします。
※講演会終了後、講師をまじえた1時間程度の懇談会をおこないます。

第84回民族学研修の旅
梅棹忠夫のモンゴル調査をたどる旅――中国内モンゴルの草原と史跡をゆく
9月8日（月）～14日（日）　7日間
※旅の詳細は「友の会」までお尋ねください。

※国立民族学博物館ミュージアム・ショップの記事は、表紙うらに移りました。

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

無形文化遺産をめぐる認識

――エチオピアの音楽職能集団ラリベロッチ

川瀬慈（かわせいつし）
民博 文化資源研究センター

二〇〇三年にユネスコ総会で採択された無形文化遺産保護条約は、西欧重視の遺産概念をうち破るラディカルな条約だとされる。しかし、選定にまつわる問題も多い。

エチオピアの無形文化

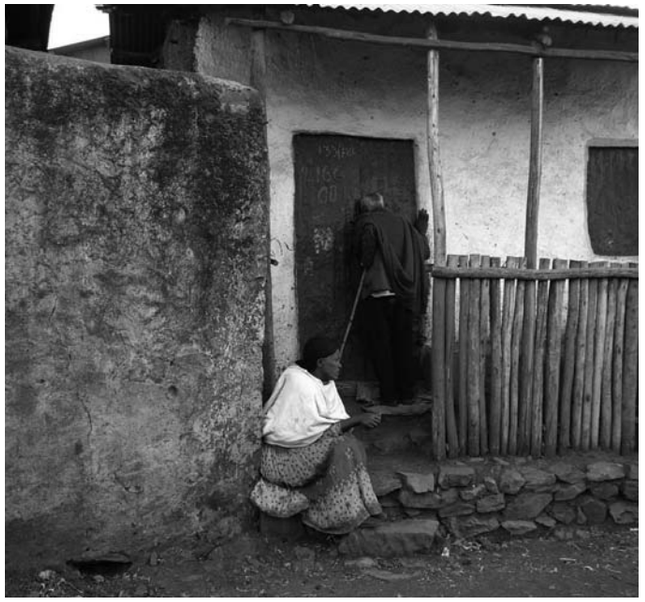
筆者は二〇〇一年以来、エチオピア北部の都市ゴンダールにおける音楽・芸能を対象にした人類学研究を、映像的手法を用いておこなってきた。エチオピアでは二〇〇五年から二〇〇八年にかけて、ノルウェー政府の援助のもとユネスコ・アジスアベバ事務局主導による「エチオピア伝統音楽・舞踊・楽器」調査・記録プロジェクトが実施された。本プロジェクトをきっかけに、各国の研究者や国際機関のスタッフ間で、エチオピアの「無形文化」をテーマにした活発な研究交流が促進されることになった。筆者自身も、映像人類学的な立場から首都のアジスアベバにおける民族舞踊の映像記録をおこなうと同時に、現地の研究者による映像記録の補助や指導をおこなった。筆者は、本プロジェクトに実際にかかわることで、何を無形文化とみなすかの認識、さらには、保護すべき無形文化遺産に対する見解については、研究者間のみならず、無形文化にかかわる当事者の社会においても大きく異なり、なかなか一筋縄にいかないことを学んだ。

都市ゴンダール、ファシル城をはじめとする世界遺産に登録された遺跡群がみえる

音楽職能集団、ラリベロッチ

この期間とくに、無形文化の調査と保護における映像記録の活用に関する機運が高まり、筆者が制作に携わったエチオピアの音楽や舞踊に関する映像記録が、エチオピア国内の無形文化保護にかかわる会議やアジスアベバ大学エチオピア研究所、JICAエチオピア事務局等で幾度となく紹介された。そんな折に、エチオピア観光文化省とユネスコが共催した会議「ジブチ・エチオピア・ソマリア無形文化遺産会議」において、ユネスコ・アジスアベバ事務局のスタッフのはからいで、ラリベロッチとよばれる音楽職能集団の活動を対象にした筆者による映像記録が上映されたことがある。

ラリベロッチは、単独で、あるいは夫婦で、早朝に家の軒先において斉唱をおこない、人びとに祝福のことばを与え、それに対し、金銭、衣服、食物等を受け取る。一部の地域では、法要（人の死から四〇日後、一～七年ごとにおこなわれる）の際に故人の名誉をたたえる目的の斉唱をおこない、その報酬に牛の大腿部（だいたいぶ）を受け取るのが慣わしである。ラリベロッチは、音楽活動をやめるとハンセン病（ラリベロッチの隠語で〝シュカッチ〟とよばれる）に侵されるという信仰をもち、ハンセン病への恐れから、先祖代々音楽活動を継承してきた集団である、と人びとに信じられてきた。ラリベロッチは近所の住人たちに家々の主の名前、宗教、職業、家族構成等の情報をあらかじめ取材し、歌詞の内容へと反映させていく。筆者は、筆者自身が強く惹きつけられた、ラリベロッチのこうしたたかさや、まるでコミカルな演劇のような住人たちとの豊かなやりとりにフォーカスして映像記録を蓄積してきた。



家の玄関で斉唱をおこなうラリベロッチ

恥ずべき文化か、遺されるべき文化か

さて「ジブチ・エチオピア・ソマリア無形文化遺産会議」での上映では、会場のエチオピア文化遺産調査保護局の役人たちから、こちらが予期しなかった反応を得た。それは、乞食（こじき）のような放浪の職能集団をとらえた筆者作品は、エチオピアの貧困イメージを強調させる、という批判であった。無形文化をめぐる国際的な議論の席では、とりわけ無形文化の「見ばえ」を整えることに関心が集中する。

ラリベロッチをはじめ、音楽を専業とする職能集団は、ポピュラーミュージックの世界で活躍するスターが出てきた現在でも、モヤテンニャ（〝手に職をもつもの〟の意）という範疇（はんちゅう）のもと、機織、鍛冶屋、壺（つぼ）作り、皮なめしなどの職人とともに、卑しい職能をもつ人びととして蔑視される傾向にある。しかし筆者は、上記の役人のような主張をそのまま鵜呑（うの）みにせず、無形文化をめぐるそうした認識の違いの政治・文化的背景、時代的な変遷を注意深く探る姿勢が研究者には求められていると考える。

多文化をあきなう

綿花の有機栽培とフェアトレードは両立するか

牧田（まきた） りえ　立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科准教授

フェアトレードが理念として掲げる「持続可能な生産」。それを実現する方法のひとつに、有機栽培のような環境への配慮があるが、一筋縄ではいかない現地の事情がある。そこからは、避けて通れない貧困の問題と、世界経済の思惑がみえてくる。

遺伝子組み換え種子が席巻する綿花栽培

インドは世界第二の綿花生産国である。しかし、深刻な虫害と未発達な灌漑（かんがい）のためにその生産性は低く、中部一帯に広がる綿花栽培地域は借金を苦にした農民の自殺が多いことで知られる地域である。二〇〇二年から導入された綿の遺伝子組み換え種子（以下BT種子）は、収量を増やすだけでなく生産費用も節約できるという触れ込みで、あっという間に広まった。BT種子は生態系を破壊すると反対運動も起きているが、綿に関しては貧困削減に貢献すると結論づける研究結果とそれに反論する研究結果の両方がある。この論争に決着はついていないものの、すでに全国の綿花栽培地の九割でBT種子が作付けられている。そして、もっとも恩恵を受けているのはBT種子の製造・販売に携わる多国籍企業とインドの関連企業だということは紛れもない事実である。

有機農業の挑戦

貧しい農民を救うために有機栽培とフェアトレードを推進するNGOを、アンドラプラデシュ州北部に訪ねた。このNGOの支援により農民たちは二〇〇六年に栽培方法を転換しはじめた。有機認証を取得するために転換後三年間待たねばならないが、FLO（国際的なフェアトレード認証発行機関）の認証は転換後すぐに取得していた。果たして小規模農民たちは、BT種子、有機栽培、フェアトレードの三者に対峙したとき、何をどのように選び取るのだろうか。

有機認証はBT種子を全面的に禁止している。しかし、わたしの調査地域で販売されていた綿花種子はBT種子のみであり、それ以外の種子を見たことがない農民が圧倒的多数を占めていた。有機農法を導入するにあたり、同NGOは非BT種子を特別に仕入れて対象農民に配布するところから始めた。BT種子の半値に近い価格で農民に提供することができた。

綿花の有機栽培に着手しても、全作付面積を一挙に有機へ転換する者は少なかった。大半の農民は一部を有機に転換し、並行して残りの土地でBT種子を作付けた。BT種子には従来通り化学肥料や農薬を使用した。有機への一斉転換によって収量が減少することを恐れたのである。有機栽培の面積を徐々に増やしてくれればそれでよい、とNGOは考えていた。しかし、三年間が経過した後、有機栽培を継続できた者はごく少数で、多くの農民はBT種子を用いた従来通りの栽培に戻っていった。これではもちろん有機認証の取得は望めない。

フェアトレードが果たした役割

有機認証を取得するまでの転換期間は綿花を高く売ることはできない。それならば、フェアトレード市場への販売が転換期間の農民を助けられないだろうか。これがNGOの当初の期待だった。市場価格が高値で推移していたのでフェアトレードの最低価格保証制度が農民の関心を引くことはなかったが、フェアトレード市場への販売量に応じて後から支払われる奨励金は有効だった。まず奨励金を基金とし、農民が有機栽培用の非BT種子を購入するための無利子ローン制度がつくられた。各シーズンの始めに必要となる種子等の費用は小規模農民の家計を圧迫し、借金の原因となる。現金を出さずに綿花種子を入手でき、収穫後に無利子で返済すればよいというシステムは対象農民から歓迎され、彼らが有機栽培を始める契機となった。残りの奨励金も、各農民グループでの話し合いの結果、有機肥料の原料、給水パイプ、有機殺虫剤の散布機等の購入に使われた。総じて、フェアトレードの奨励金は有機栽培の促進のために使用されたといえる。

と同時に、予期せずして、フェアトレード奨励金はBT種子の普及にも加担することになったのである。種子の購入には現金払いと収穫後の付け払いの二通りがある。後者は利子の分だけ高くなるが、作付け前に資金が不足する農民は、これを選ばざるをえない。有機栽培を部分的におこない、非BT種子とBT種子の両方を植える農民は、NGOの無利子ローンで非BT種子を入手することによって節約できた資金をBT種子の「現金」購入にまわした。つまり、フェアトレード奨励金のおかげで、BT種子を以前よりも安く購入できるようになったのである。ある農民は、同奨励金で購入した殺虫剤の散布機は有機だけでなくBT種子用の化学薬品でも使うと告白した。

BT種子の普及を促進し大企業を儲（もう）けさせることはもちろんフェアトレードの本意ではない。フェアトレードの認証団体もBT種子の利用には反対しているが、フェアトレード認証によってBT種子の綿花の混入を防止することは難しい。有機認証は生態学的観点からBT種子を禁じているが、フェアトレードは不利な条件に置かれた生産者の擁護を第一目的としているため、厳密な検査をおこなって生産者に負担をかけることをアンフェアだと考える。貧しい生産者への支援と環境保全というふたつの課題の板挟みになったフェアトレードは、BT種子の「侵入」を図らずも許容してしまったといえよう。両課題を達成するにはフェアトレードだけでは荷が重い。有機農業を貧困対策として用いるのなら、転換中の農民の収入を保障する別のしくみが必須である。

フェアトレード綿花生産者の住む村の様子

フェアトレード奨励金でつくった有機肥料精製所

綿花を摘む女性労働者

フェアトレード綿花生産者とその家族

フェアトレード奨励金で購入した殺虫剤の散布機

村内にある収穫した綿花の一時集荷所

味の根っこ

ブルガリアの保存食

リュテニツァ

マリア・ヨトヴァ　民博 外来研究員

リュテニツァの原型（今は「リュティカ」という名前で知られており、西ブルガリアを中心に夏に作られる）

ブルガリアの「瓶詰め経済」

日本では、「ブルガリアといえばヨーグルト」というイメージが強いが、ブルガリア人が食べてきたのは、もちろんヨーグルトだけではない。主食はあくまでもパンであり、おかずとして乳製品のほか、野菜や肉類も食べてきたのだ。一九八九年の社会主義の崩壊以降、全体的に家畜頭数が減少したが、地方ではいまだに羊や鶏を飼いながら、食料を自給する家庭が多い。そういった家庭では夏から秋にかけて、女性たちが腕によりをかけ、野菜や果物を塩漬けや酢漬けにして保存食を作る。ブルガリアの統計局によると、毎年、家庭で作られる保存食は二億瓶を超えており、一世帯当たり一〇〇瓶にもおよぶそうだ。この数字からも「瓶詰め経済」がブルガリアの人びとの生活にいかに重要な役割を果たしているのかがわかる。

保存食の王様

数々の保存食のなかでも、赤パプリカとトマト主体のペースト状の「リュテニツァ」は国民食として絶大な人気を誇る。パンとの組み合わせは抜群であるため、朝食から子どものおやつまで、またサラダソースから肉や魚料理の付け合わせまで、万能食とよばれるほど用途が広い。ブルガリア人のあいだでは老若男女問わず、だれでも一度はリュテニツァ作りの参加経験がある。リュテニツァ作りは他の保存食と比べても時間と労力がかかるのだが、ようやくできあがった香ばしいペーストを瓶詰めにするときは何とも言えない達成感を味わえる。

家庭での保存食づくりのようす

「おばあちゃん」の味探し

リュテニツァは地域や家庭によって材料や味付けの仕方が千差万別で、家庭ごとに独自の味をもつ。主役のトマトと赤パプリカ以外に、好みでニンジンやナス、ニンニク、オニオン、唐辛子、チーズでさえ入れる人もいる。それらをいかに美味しくかつ効率よく加工し瓶詰めするかが、腕の見せ所となる。しかし、都会に住んでいる人びとはスペースや時間を持ち合わせていないため、市販の工業品に頼らざるを得ない。ところが、それには保存料や着色材などの添加物が含まれており、またコスト削減のため国産のトマトやパプリカではなく、輸入品の野菜ピューレが使われることが多い。このようなことから、都会の人びとはリュテニツァ本来の味を求めており、最近ではリュテニツァをはじめとした地方の「おばあちゃん」手作りの保存食がネットで取り寄せできるようになってきている。

ペースト状の野菜を大きな鍋に入れて焼く

ブルガリア人の典型的な朝食。パン、リュテニツァ、チーズ

社会主義期において生まれ変わったリュテニツァ

現在、リュテニツァはブルガリア固有の伝統とみなされるが、今の形態で保存食として広まったのはわずか五〇年前のことである。そもそもリュテニツァの語幹「リュティ」は「辛い」という意味であり、一八九九年の辞書にも「ニンニクとパプリカの料理」または「イラクサと唐辛子の料理」と記載されている。地域によってパプリカ以外にトマトや玉ねぎなどを使うこともあったが、瓶もない時代においては保存食としてではなく、夏の食べ物として親しまれていた。しかし一九四四年になると、ブルガリアは社会主義的近代化の路線を歩むことになり、あらたな食品の生産・流通システムが整備されていった。そこで、賞味期限の長い加工食品は、新鮮な野菜や果物よりも配給しやすいことから技術的に進化し、あらたなレシピが数多く開発されていった。国営工場のなかでリュテニツァもペースト状の保存食へと姿を変えることになり、国民のあいだでも「瓶詰めの万能食」へと再認知されていったのである。さらに、瓶の蓋を閉める装置やパプリカを焼く器具「チュシコペク」などの自家製保存食用の便利なグッズの開発が進むにつれて、ブルガリアの保存食手作り文化が開花していき、食糧不足の社会主義時代において人びとの生活を根底から支えていくことになった。

二〇一〇年におこなわれた「二〇世紀のブルガリアのもっとも重大な発明」という国民投票キャンペーンで、チュシコペクの開発が第一位で選出された。日本の皆さんからすれば、これがなにを意味するのか、さっぱりわからないかもしれない。しかしこの投票結果は、手作りリュテニツァの歴史におけるチュシコペクの重要性を示すだけではなく、社会主義期におけるブルガリア人の創意工夫に富んだ生活の象徴としての大きな意味をも反映しているのである。

リュテニツァの作り方（瓶（300 g）10 ～ 12 本分）

パプリカ　5kg	① ニンジンはよく洗って柔らかくなるまでゆでる。
トマト　2kg	② パプリカとナスは全面が焦げるまで焼いて皮をむく。
ナス　2kg	③ パプリカの種を取り除いておく。
ニンジン　1kg	④ トマトと、以上のように準備されたパプリカ、ナスとニンジンをミート・チョッパーに入れてミンチ状にする（フードプロセッサーで代用可）。
オリーブオイル　300g	⑤ ④を鍋に入れて、トマトの水分が飛ぶまで（約 2 時間）中火で煮込む。リュテニツァが焦げつかないように混ぜ続ける。
砂糖　100g	⑥ 最後におろしたにんにく、オリーブオイル、砂糖、塩を加えて、よく混ぜてできあがり。
塩　10g	⑦ ⑥を広口瓶に入れ、余計な空気や雑菌が入らないように丁寧に蓋を閉めて 10 分ほど沸騰させる。
おろしニンニク　6 片	

※保存食のため一度に大量に作ります。分量は適宜調整してください。

世界を変える？！

人間学のキーワード

クィア
Queer

新ヶ江章友（しんがえあきとも）　名古屋市立大学男女共同参画推進センター特任助教

あるエピソードから始めよう。わたしが調査でインタビューした男性Aは、自分を異性愛者だと認識している。しかしAの性欲の対象は、女装した男性である。女装した男性は、いつも女装をしているわけではない。女装は単なる趣味である。ある人から見れば、女装をした「男性」に性欲を感じるのだから、Aは「同性愛者」だと思うかもしれない。だがAは、「異性愛者」だと自認する。あえていえば、自分は「変態」だと。ここで彼がいう「変態」が、「クィア」の意味に近い。「クィア」とは、わかりやすくいえば「変態」である。

しかしここで、「わたしは変態です！」と安易に自己を規定してしまったら、つまりクィアをアイデンティティとしてしまったら、クィア・スタディーズの目標とは若干ずれてしまう。一九九〇年代に誕生したクィア・スタディーズという学問は、特定の人びとを特定のアイデンティティに縛り付けることを拒否することから始まるからである。

このことは、クィア・スタディーズを生み出した母体であるレズビアン／ゲイ・スタディーズと比較するとはっきりする。レズビアン／ゲイ・スタディーズは、レズビアンやゲイというアイデンティティにどこまでもこだわる。彼らは、「同性愛者」は、古代ギリシアや江戸時代の日本など、いつの時代にもどこの場所にも存在したのだと主張する。

だがクィア・スタディーズは、レズビアン／ゲイ・スタディーズのそのような立場に「待った」をかける。クィア・スタディーズは、ある特定の人びとがレズビアンやゲイだと自認するよう仕向ける現代における状況、つまり性と自己のアイデンティティを縛り付ける権力のあり方が問題なのだと考えるのだ。古代ギリシアや江戸時代の日本において同性間で性行為をおこなっていた人びとは、現代社会に生きるゲイやレズビアンとはまったく異なった経験をしている。そもそも、彼ら彼女らは「同性愛者」だと自認することもない。同性とセックスをしたからといって悩んだりするのは現代人特有なのだ。

したがって、ゲイ、レズビアン、トランスジェンダー、トランスセクシュアル、バイセクシュアル、アセクシュアル……などと性的アイデンティティを永遠に細分化しながら、それらをすべて含むカテゴリーを「クィア」とするのは、クィア・スタディーズそのものの成立過程からいえば間違っているといえるかもしれない（「クィア・ネイション」という社会的運動として、そのような連帯はたしかにありえるのかもしれないが）。

クィアの新しさは、必ずしも性に限定されないアイデンティティをめぐる問題（人種、宗教、階級など）にも応用可能なことにある。近年の民族や宗教的な対立の根源には、人びとのアイデンティティを一元的に固定化するアイデンティティ・ポリティクスがはらむ問題とも関係していよう。「変態」は世界を変えることができるのか？ それができると信じ、そのことを真剣に問おうとする姿勢こそ、クィアが目指すところなのである。

異聞逸聞

ヤマトと琉球のはざまで

前田 達朗（まえだ たつろう）　東京外国語大学准教授

二〇一四年の「春のセンバツ」、二一世紀枠で奄美の大島高校が出場した。その大会の優勝校の平安高校とぶつかり、破れはしたが中盤までは互角以上に渡りあった。一塁側のスタンドは異様な雰囲気だった。超満員のアルプスに入りきれず内外野両側にはみ出した応援団は、年齢層が高かった。奄美からの応援団はもちろん、関西在住の出身者が押し寄せたのだ。

与論から喜界島までの「有人六島」といわれる奄美群島は、行政上、鹿児島県に含まれる。一七世紀に薩摩が琉球に軍事侵攻し植民地化した名残である。支配は苛烈だった。薩摩の財政を支えた黒糖の原料のサトウキビのモノカルチャーを強いた。そのぶん食料の生産は制限され、簡単に飢饉（ききん）に陥った。借財がかさんだ農民は、債務奴隷「ヤンチュ（家人）」となる。ヤンチュ層は全人口の三割に達したという。薩摩が鹿児島になっても収奪の構造はかわらず、人びとは生きるために出稼ぎに出る。一九二〇年代をピークに朝鮮や沖縄からと同様に阪神工業地帯に廉価な労働力として奄美人はやってきて、戦後を通じていまも流れは途切れていない。そして出稼ぎ先での被差別経験と戦時中の皇民化政策が、沖縄と同じように奄美でも「本土」でも自分たちのことばや文化を消し去ることで「日本人」になることを求めた。一九五三年までの占領経験もこれに拍車をかける。今も奄美では個人宅でも日の丸や皇室の写真をよくみかける。群島の人口は二二万弱、関西在住の出身者は、一説には係累を含めて三〇万人いるといわれる。同郷会を作り、「二世」という言い方で出身者の子どもたちを呼ぶのも、朝鮮や沖縄の出身者と似ている。

甲子園の大島高校側のスタンド。アルプス席 4,000 は前売りで完売。春の大会の１回戦では極めてまれなことだという

その人たちがスタンドにそれぞれの「シマ（共同体の意）」への思いを持ち寄ったのだ。結局は大差がついたが、試合のあいだ、甲子園は確かに「シマ」だった。

では奄美は沖縄とともに同じ「琉球」なのか、と言われると返事に困るのである。言語や文化的には当然似通っているのだが、人びとは沖縄ではないと主張し続けている。沖縄の側からの目も冷めている。琉球かヤマトかという議論は的外れなのだろう。鹿児島の支配は続き、そのことを主張するには奄美の声はあまりにも小さい。「日本人」であることにすがるしかないのだ。

奄美の三味線は沖縄の三線（さんしん）と構造は一緒だが、琉球音階ではなく和音階で奏でられる。

奄美は奄美である、としか今のところは言いようがない。

制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

曼荼羅をまとい宇宙になる

大内典
宮城学院女子大学教授

社会における役割を明示してくれる衣装ならめずらしくない。しかし身にまとうことで、ある宇宙観、いや宇宙そのものが心身と内奥からひとつになる衣装なんて、他にあるだろうか。

「なりきり」力

「総新客衆！」「うけたもうー」

毎年夏の終わり、羽黒山中に大時代的な声が響く。江戸時代から連綿と続けられてきた羽黒修験「秋の峰」である。呼びかけるのは儀礼を率いる先達のひとり導師。応えるのは総勢八〇名から百名にもなる峰入りの行者。行者たちのほとんどは、夏の峰入りのときだけ山伏名を名乗るいわば「パートタイム」山伏だ。普段は普通の職業人として、あるいは学生として、山伏とは無縁の生活を送る。その彼らがひとたび「秋の峰」に入ると、地位も年齢も性別も白紙に戻り、ひとりの山伏になりきって行に向き合う。そこでの筆者は羽黒修験「妙音院」。現実の自分を葬り胎児となって母胎である山に籠る。そこで地獄から仏に至る心の成長過程を経験しながら、自分が大日如来＝宇宙とひとつである理に触れ、あらたな存在としてこの世に戻るのである。その過程をいかに「なりきって」過ごすことができるかが、儀礼のリアリティを左右する。山伏名で呼ばれる。断食や睡眠不足で生命力をゼロに近いところまで落とす。とうがらし入りの煙でいぶされる「南蛮いぶし」で地獄を体感する。いずれも「なりきり」力を支える。山伏装束もまた、大きな役割を担っている。

シンボルのかたまり

山に伏せるから「山伏」。山で「験」を「修」めるから「修験」。山中での修行（峰入り）が整備されたのは中世とされる。西の熊野修験に対して東日本を制したのが出羽三山を本拠とする羽黒修験だった。峰入りの山伏は、独特な装束をつける。鈴懸衣の名で知られる上衣、頭につけるお椀型の頭巾、ぼんぼりのような飾りがついた結袈裟、貝の緒といわれる朱色の腰紐、鹿皮の腰当て引敷、そして法螺貝等々。それぞれ実用的な用途とともに象徴的な意味をもつ。たとえば頭巾は山道で額を護り、水場では器にもなる。貝の緒は、ザイルの役割を果たす（じつは筆者、峰入り初参加のとき、急な山道ですってんころりん、足を痛めて動けなくなった。そのとき、先達のひとりがやおら貝の緒を解き、背中にわたしをくくりつけて軽々と山を降りてくれた！）。一方で、頭巾は「大日如来の五智の宝冠」、貝の緒は行者と母胎を結ぶ「へその緒」と、意味付けられている。羽黒修験の上衣は、市松文様に獅子が描かれた独特な意匠で、「摺衣」といわれる。獅子は仏の教え、市松文様はその教えが盤石であることを示す。そして、装束全体は不動明王を象るものであるとともに、上衣は宇宙の生成力をあらわす胎蔵界、袴は宇宙の理をあらわす金剛界とされる。つまり、この装束で、全身に仏教の宇宙観を象徴する胎蔵・金剛の曼荼羅をまとうことになる。

究極のコスプレといったら罰が当たるだろうが、この装束がもたらす「なりきり力」は事実、大きい。装束をつけた途端、みな「山伏」の顔になる。そうして味わう「再生」の実感があるからこそ、明治の廃仏毀釈も第二次世界大戦後の社会の激変も越えて、「秋の峰」は生き続けてきたのだ。

つつまれ、解き放たれる

羽黒修験の峰入りでは、音が重要な役割を担う。それを追いたいがために峰入りをはじめて早や幾年月。儀礼的な音と衣装という文化装置には大きな共通点がある。音も衣装もわれわれをつつみ込み、心身を変容させる。峰入りの回数を重ねた装束には、抹香の香り、「南蛮いぶし」の匂いが染み込んでいる。摺衣の感触とこの匂いにつつまれるたび、山という自然環境を活かし、心身を解き放つしくみを生んだ知恵の深さを思う。

月山八合目に集まった修験者。雲間に鳥海山（提供・関守ゲイノー）

羽黒修験の峰入り行で籠る荒澤寺（提供・関守ゲイノー）

法螺貝。修験十六道具のひとつ

大先達（羽黒修験の長）と外国人修験者（提供・関守ゲイノー）

先達衆。役種に応じた色違いの装束をつける（提供・関守ゲイノー）

月刊みんぱく 2014 6月号

編集後記

この編集後記を執筆している現在、ヨーロッパにいる。ユーロヴィション・ソングコンテストのフィナーレがコペンハーゲンで開催され、ヨーロッパ中に中継された。いうなれば欧州歌合戦なのであるが、現在ではイスラエル、トルコ、アゼルバイジャンなども参加国に含まれるので、かなり拡大解釈された「ヨーロッパ」といえよう（ちなみに、「欧州放送連合の正加盟国」に参加権があるらしい）。欧州懐疑主義の高まりが懸念され、政治経済的な軋轢を抱えながらも、テレビの普及の歴史と同じくらいのあいだ、毎年欠かさず開かれているのだから、あっぱれである。

競い合いながらも楽しむという精神はアジアにもある。本号の特集記事にあるように、朝鮮語では「大同ノリ」といい、こうした遊びは人びとの気持ちをひとつにする。モンゴルからインド、はては西アジアの国々までが参加する「アジアヴィジョン」歌謡祭が実現したら、まさにバラエティー、多様性に富んでさぞかし楽しいだろう、と想像してみる。

調べてみると実際、アジア太平洋放送連合が同様の歌謡祭を昨年10月にハノイで開いたそうだが、まったく知らなかった。

（山中由里子）

●表紙：薬だんす　標本番号 H0210009　地域：韓国、ソウル市

次号の予告

特集

沖縄のくらし（仮）

※みんぱくウィークエンド・サロンの情報は、13ページに移りました。

みんぱくをもっと楽しみたい人のために――会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00～17：00）

月刊みんぱく 2014年6月号
第38巻第6号通巻第441号　2014年6月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　池谷和信
編集委員　山中由里子（編集長）　樫永真佐夫　河合洋尚　庄司博史　菅瀬晶子　丹羽典生　丸川雄三
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology